

令和 2 年 6 月 16 日現在

機関番号：32643

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K12525

研究課題名（和文）口腔機能に障害を持つ児への舌刺激訓練効果の検討

研究課題名（英文）Study on the effect of tongue stimulation training on children with impaired oral function

研究代表者

田尻 登志子 (tajiri, toshiko)

帝京大学・公私立大学の部局等・講師

研究者番号：60759405

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：心身の発達に障害をもつ子供は、咀嚼・嚥下機能に問題を抱えていることも多く、この傾向は児の成長発達への影響と共に母親のケアの負担となっている。このような児が抱える咀嚼・嚥下機能の問題に対するケアの一つとして行われている『摂食機能訓練を応用した舌刺激訓練法』の効果を検討するために観察・質問紙調査項目を作成し、児の母親4名を対象としてインタビュー調査を行った。訓練を受ける前後の親子関係、社会交流に焦点を当て質的に分析し、効果を検討した。インタビューデータから、【親子のコミュニケーションの改善】、【母親の心の安定】、【子どもの変化】、【夫の協力】の4つのカテゴリーが効果として整理された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、口腔発達に課題をもつ児への舌刺激訓練（ペロタッチ）実施前後の効果検討を行ったものである。この訓練手法は、乳幼児健康診査や育児相談などで「言葉が出るのが遅い」、「食べるのが下手」などの口腔機能の発達に課題を持つ子どもへのアプローチ法の一つとして、保護者への指導を通し、保護者自身によって子供に行われるものである。本研究により、この訓練手法が親子関係、社会交流関連における保健分野の口腔機能発達支援方法の一つとしての示唆が得られたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：Children with mental and physical development who have disabilities often have problems with swallowing and swallowing function, and this tendency is a burden on the mother's care along with the effect on the growth and development of the baby. In order to examine the effect of the tongue stimulation training method which applied the eating function training which is done as one of the care for the problem of the chewing and swallowing function that such a child has, an observation and questionnaire survey item was prepared, An interview survey was conducted on four mothers of the baby. We focused on parent-child relationships and social exchange before and after training, and qualitatively analyzed the effects. From the interview data, four categories of [improvement of parent-child communication], [mother's mental stability], [child change] and [husband cooperation] were arranged as effective.

研究分野：障害児口腔保健

キーワード：障害児 摂食機能訓練 舌刺激訓練法 社会的交流 親子関係

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

近年、心身の発達に障害をもつ子供の数は増加傾向にあり、咀嚼・嚥下機能に問題を抱えていることも多く、この傾向は児の成長発達への影響と共に母親のケアの負担となっている。この課題に対する対策の一つとして摂食機能訓練を応用した舌刺激訓練法が提案されている。今回、この中のバンガード法(口内法)を応用した簡便な手法である「ペロタッチ」の効果について、特に親子関係と社会交流に焦点を当て、「ペロタッチ」前後の変化に着目して検討を行った。尚、ペロタッチとは、小児用歯ブラシを用い、ブラシ部で50g程度の圧力で、舌尖・両舌側の3か所へ軽く3~4回ずつ、計10秒~15秒程度の刺激を与える方法である。本方法の目標は、口腔発達に課題を持つ児の嚥下力・咀嚼力を改善し、保護者が本方法を学び、子どもに実施するものである。

地域保健領域で、児の口腔への着目は、歯に関わるものが中心で、口腔機能はあまり着目されなかった。また、舌に対するアプローチは、医療や療育の現場での応用が中心であった。本研究は、保健分野が対象とする要フォロー児のうちの口腔機能障害を持つ児に対して、舌刺激訓練の介入の効果を明らかにしようとしている点に特徴を有す。

### 2. 研究の目的

本研究では口腔発達に課題をもつ児の嚥下機能への舌刺激訓練効果を明らかにするために、発達に課題を持つ児の母親を対象として、ペロタッチ実施前後の変化について、親子関係と社会交流に焦点を当てて検討する事を目的とする。

### 3. 研究の方法

#### (1) 対象者

児童発達支援機関から紹介を受け2017年1月~9月にペロタッチを開始し、本研究に同意が得られたK市在住の保護者4名を研究対象者とした。なお、児の障害名は、自閉症スペクトラム3名、診断名なし1名であった。

調査参加時の概要は、表1、表2のとおり。

表1

調査参加時の概要

| 月齢    | 3歳4~5か月 | 6歳0~3か月 |
|-------|---------|---------|
| 人数(人) | 2       | 2       |

表2

ペロタッチ継続期間と実施頻度

| 継続期間 | 6か月          | 8か月            | 12か月      | 14か月            |
|------|--------------|----------------|-----------|-----------------|
| 実施頻度 | 1 毎日<br>2 朝夕 | 1 ほぼ毎日<br>1 毎日 | 毎日<br>1 回 | 0 週<br>1 回<br>} |
| 人数   | 1            | 1              | 1         | 1               |

#### (2) インタビュー調査内容

インタビューガイドに基づき、個別に60分~70分間の半構成的面接を舌刺激訓練(ペロタッチ)実施後に一回実施した。インタビュー内容は、「ペロタッチ前後の社会性の変化」と「ペロタッチ前後の親子関係の変化」とした。

#### (3) 分析方法

面接内容から、逐語録を作成して文字データとした質的データ分析手法を用いた。本研究において「口腔機能に課題を持つ児」とは、乳幼児健診等で歯科医師により嚥下・咀嚼機能に課題があると判断された児で、年齢は就学前までの児と定義した。

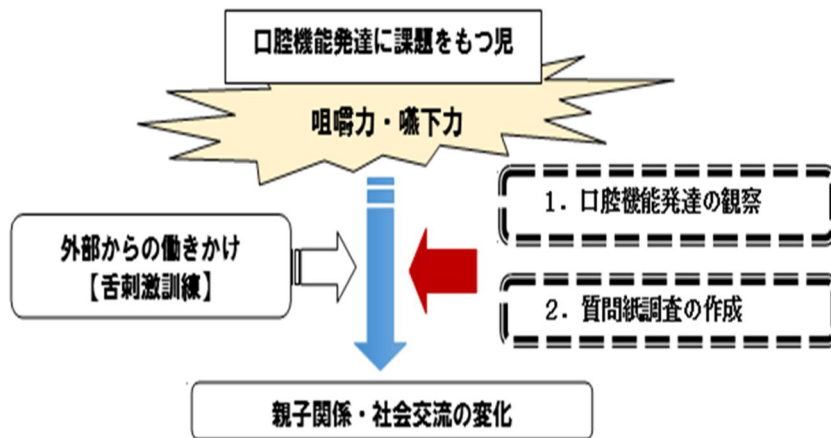


図1 調査研究の概要

#### 4. 研究成果

##### (1) 属性

3歳4~5か月児をもつ母親2名、6歳0~3か月児をもつ母親2名 計4名

##### (2) 母親のベロタッチ実施以降の社会性及び親子関係の変化

###### Aちゃん母親：Aさん

Aさんは、自身の子どもAちゃんに対しベロタッチを実施した。以前のAさんの子どもは、コミュニケーションへの自信が無く、コミュニケーションの困難さを感じている様子で、意志表出代替手段＝「にらむ」という状況があった。ベロタッチに出会い、ベロタッチを通じた親子の関わりが増えてくることで、少しずつコミュニケーション能力が向上し、それに伴って、表情の変化と羞恥心の芽出が認められた。さらに、他者への伝わることの楽しさからコミュニケーションの喜びを感じている様子で、コミュニケーション意欲の向上が認められている。このことは、Aさん自身が以前の子どもの様子を見て抱いていたつらい気持ちの減少へとつながった。

###### Bくんの母親：Bさん

Bさんは、自身の子どもBくんに対しベロタッチを行った。Bさんがベロタッチをはじめた頃のBくんは、積極的な人へのかかわりができず、人間関係が構築されたのは両親や祖父母など限られた人のみであった。また、アイコンタクトも成立せず、やり取りの困難さも認められた。しかしながらベロタッチを実施するようになり、半年ぐらいの経過後、自発的な行動も芽生え、自傷行為の減少など心の状態変化も感じられるようになった。最終的にはBさんとのコミュニケーションでもアイコンタクトが成立するようになり心の安定につながっている。

ベロタッチをはじめた頃より、親子での関わりの時間が増えることで、関わりのうれしさを感じ母としての役割の確認を感じたようであった。またベロタッチの実施時にはコミュニケーションが取れることもあり具体的な効果を感じることもできたが、その場面のみということで効果の確信の揺れも感じられていたようである。その際、徐々にではあるが、母親としての心の安定を感じるようになってきたが、再び昨年より子供の不安的な行動もあり、母親としての心の不安定化がみられる状況であった。しかしながら、子供の不安定な行動は続いているが、子供との関わりにより心の平静さは得られるようになっている。

###### Cちゃんの母親：Cさん

ベロタッチをはじめた頃より、親子での関わりの時間が増えることで、関わりのうれしさを感じ、母としての役割の確認を感じたようであった。またベロタッチの実施時にはコミュニケーションが取れることもあり具体的な効果を感じることもできたが、その場面のみということで効果の確信の揺れも感じられていたようである。その際、徐々にではあるが、母親としての心の安定を感じるようになってきたが、再び昨年より子供の不安的な行動もあり、母親としての心の不安定化がみられる状況であった。しかしながら、子供の不安定な行動は続いているが、子供との関わりにより心の平静さは得られるようになっている。

###### Dくんの母親：Dさん

自閉症児D君の母親Dさんは、Dくんとの会話のしづらさや対応の面倒さを感じていた。そのような中、Dくんは4歳10カ月から児童発達支援機関へ通園開始した。園での療育は、母にとって集団の中のDくんの客観的な観察と発達特徴の気づきの契機となった。Dくんはペロタッチ開始後、コミュニケーション能力が向上したと母は捉えていた。子供の遊びは、大雑把で綺麗にできないという特徴がみられるものの、できたことをほめるという児童発達支援機関での学びを基に、親子での頑張りの結果、子どもが出来なかったことができるようになってきた。その結果、コミュニケーションの増加という変化がみられ、子供の成長を発見し、ペロタッチは子どもとの関わり合いとを感じるに至った。

以上の結果より、ペロタッチ実施以前の子供は、コミュニケーションの困難さを抱えていたという意見が聴取された。具体的内容は、アイコンタクトの不成立などの、やり取りの困難さであった。それに対し、ペロタッチ実施後の子供は、表情に変化がみられ、徐々にコミュニケーション能力が向上してきたこと、自発的行動や羞恥心が芽生えてきたことなどが聴取された。母親自身の変化としては、ペロタッチ実施前は、子どもとの関わり合いのしづらさから、心の不安定化があったものの、実施後は、子どもとのコミュニケーションの改善により、つらい気持ちが減少し、心の平静さが得られるようになったとの感想を聴取した。

更に、夫の副次的効果としては、ペロタッチそのものの簡便さから妻から夫へ頼みやすい内容であり、ペロタッチ実施後は、夫の協力が増えたという感想が聴取された。

これより、図2のように【親子のコミュニケーションの改善】、【母親の心の安定】、【子どもの変化】、【夫の協力】の4つのカテゴリーが効果として整理された。

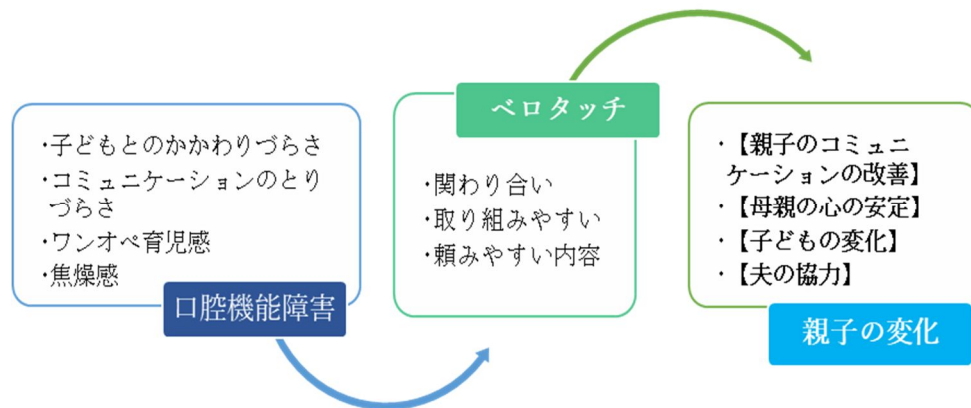


図2 訓練前後の変化

### (3) 考察

ペロタッチ実施前後の児の表情の変化と、コミュニケーションの改善により、口腔機能の向上の可能性が示唆された。

ペロタッチは母親の心の安定化のきっかけの一つとなっており、夫婦で取り組みやすいことが明らかになった。

今後、ペロタッチ後の口腔機能、嚥下機能、姿勢、言葉の様子などの変化についての更なる検討が必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>田尻登志子                                     |
| 2. 発表標題<br>口腔機能に課題を持つ児への舌刺激訓練効果の検討-親子関係、社会交流に焦点を当てて- |
| 3. 学会等名<br>第8回日本公衆衛生看護学会総会、愛媛県                       |
| 4. 発表年<br>2020年                                      |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)             | 備考 |
|-------|--|-----------------------------------|----|
| 研究分担者 | 大塚 裕一<br>(OOTUKA Yuuichi)<br>(70638436)  | 熊本保健科学大学・保健科学部・教授<br><br>(37409)  |    |
| 研究分担者 | 宮本 恵美<br>(MIYAMOTO Megumi)<br>(80623511) | 熊本保健科学大学・保健科学部・准教授<br><br>(37409) |    |
| 研究分担者 | 井崎 基博<br>(ISAKI Motohiro)<br>(60780210)  | 熊本保健科学大学・保健科学部・准教授<br><br>(37409) |    |
| 研究協力者 | 吉良 直子<br>(KIRA Naoko)                    |                                   |    |